▼秦荘東小学校稲刈り体験（9月27日）

▼愛知川小学校稲刈り体験（10月14日）

小学５年生が稲刈り体験

毎年、町内小学校では、お米や農業について学び、食の大切さを知ることを目的に地元農家の方々の協力の下、田植え体験と稲刈り体験が行われています。

しかし、昨年と今年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から田植え体験ができず、稲刈り体験だけとなった学校もあります。

今年は、９月から10月にかけて町内の各小学校で稲刈り体験が行われ、９月27日には秦荘東小学校の５年生が小学校敷地内にある田んぼ一面の稲穂を刈り取りました。

また、10月14日には愛知川小学校の５年生が農事組合法人ドリームアグリ沓掛などの協力により、沓掛にある田んぼで稲刈り体験を行いました。

児童たちは、初めて使うノコギリ鎌に緊張しながらも、元気いっぱいに稲を刈って運び、最後まで丁寧に落ち穂を探し回っていました。

収穫したお米は、学校の授業の一環で児童らが調理し、食べ物や育ててくれた人への感謝の気持ちをもって味わいます。

児童たちは、田植え体験や稲刈り体験を通して日本の主食であるお米の育て方を学ぶとともに、農家の人たちのお米づくりに対する思いや苦労について理解を深めました。

▼柴田理事長（写真中央左）と渡邉さん（写真左）

▼写真集「笑顔をありがとう」

写真集「笑顔をありがとう」寄贈式

10月5日、役場愛知川庁舎で写真集「写真でつづる森のお家と仲間たちの成長　笑顔をありがとう～家族と暮らす医療的ケアの必要な子どもたち～」の寄贈式が行われ、特定非営利活動法人　道　柴田理事長、スタッフの渡邉さんから目録と写真集が有村町長、徳田教育長へ手渡されました。

柴田理事長は「森のお家には医療的ケアが必要な重症児者の方たちが通っているが、笑顔でいっぱい。一生懸命に生きる姿を多くの人に知っていただきたい」と述べられました。

また、写真集制作に携わった渡邉さんは「言葉はなくても目が合ったり、触れ合ったりすることで伝わるものがあり、子どもたちからいつも力をもらっている」と述べられました。

寄贈いただいた20冊の写真集は図書館や保育園・幼稚園・小中学校などに設置します。

皆さんもこの写真集を手に取り、子どもたちの笑顔や一生懸命に生きる姿に触れてみてください。子どもたちの姿に、きっと力がもらえるはずです。

▼集中して取り組む参加者

▼参加者が制作したびん細工手まり

愛荘町ふるさと体験塾 neo

10月15日から17日まで、県の伝統的工芸品である愛知川びん細工手まりの制作を体験する「愛荘町ふるさと体験塾 neo」がゆめまちテラスえちで開催されました。

昨年は新型コロナウイルスの影響で中止になりましたが、今年は参加者の数をこれまでの半分に制限し、対象者を県内に限定するなどの対策を講じて実施され、男女15名がオリジナル作品の制作に挑戦しました。

参加された栗東市の男性は「10年前にびんてまりの館を訪れて、びん細工手まりの美しさに魅せられた。完成した作品を持ち帰り、さらにアレンジした作品を作りたい」と意気込みを語られました。

また、守山市の女性は愛知川図書館で開催されている「小さなびんてまり教室」で今回のイベントを知り、「定員が限られている中で参加できてラッキーだった。色々な柄の糸を使いたいが、合う色を考えるのが難しい」と慎重に作業を進めていました。

米原市の女性は還暦祝いにプレゼントされたびんてまりがきっかけで興味を持ち、「どうやってびんの中にまりが入っているのか不思議に思い、楽しみに来た」と話されていました。

参加者は、３日間作業を続け、最終日には世界にひとつだけのオリジナルびん細工手まりを完成させました。

▼折れることなくきれいに掘り起こせたさつまいも

さつまいも収穫体験

10月20日、シルバー農園で愛荘町シルバー人材センターの会員の皆さんと秦荘東小学校の児童49名がさつまいも収穫体験で交流しました。

児童たちは、愛荘町シルバー人材センターの会員の皆さんに蔓（つる）を取ってもらい、掘り起こすのを手伝ってもらいながら、友だちとも協力してたくさんのさつまいもを掘り起こしていました。

土から掘り起こしたさつまいもに、「大きいさつまいも取れたよ！」と児童たちは歓声を上げ、早く食べたいと話していました。

児童たちは収穫したさつまいもを持ち帰りました。

▼滋賀建機（株）蔭山 明夫 代表取締役（写真左）

滋賀建機から寄附金をいただきました

10月22日、滋賀建機株式会社（北八木）から300万円のご寄附をいただきました。

これは、滋賀建機50周年記念事業の一環として、町の振興に寄与するため、申し出をいただいたことによるものです。

採納は役場愛知川庁舎で行われ、滋賀建機の蔭山明夫代表取締役は「地元の皆様に喜んでもらえるようなことに使ってほしい」と有村町長に目録を手渡されました。

寄附金は、町内の活性化のため有効に活用させていただきます。